

N. ルーマンにおける「歴史と時間」の問題

——社会学方法論としての——

山下 淳志郎

- 1 はじめに
- 2 ルーマンが問題にするこれまでの歴史把握
 - 1) 社会学にとっての歴史についての一般的見解
 - 2) M. ウェーバーの歴史把握思考について
 - 3) ヘーゲルの歴史把握思考について
 - 4) K. マルクスの歴史把握思考について
- 3 ルーマンにおける「歴史の中立化」
- 4 ルーマンにおける「時間」の技術的形式化
- 5 ルーマンの思考に対する批判的見解
 - 1) ルーマンの存在論拒否と構造化技法について
 - 2) メタ理論としてのルーマンの時間論について
 - 3) 現代社会とルーマンの思考

1 はじめに

科学は、科学としてあろうとする限り、その研究対象の存在 (Wesen) へどれ程接近しているかという、実の所その本性によって課せられている故に、拒むことができず、さりとてそれに答えることができない間によって悩まされる或る種の宿命を負っている。社会学も科学であらうとする限り、この宿命的問題から本来的に免れえない筈であり、そうであれば絶えずこの問題に向い苦闘して来ており、社会学史はまさ

にこの苦闘の足跡を示していると云えるであろう。

併し社会学は、これまでの足跡をみる限り、その発端からして常に「秩序と発展」という実践的目的、テーマに導かれ、この二大テーマの何れか一方への傾きを、時代や個々の学派により示すことはあったとしても、所詮この目的実現の手段として現実社会の把握を方法論的に確立することとして展開して来たのであり、その限り、社会学は対象の存在 (Wesen) そのものの把握、知の獲得よりも、現実的諸問題を抱える社会の諸現象の解明という、いうならばプラグマティッシュな技術知の獲得にその学問的性格を濃厚に示している。否、むしろ経験実証科学であることを主張することにより、社会学は対象の存在 (Wesen) は認識されえないということにより、それへの接近の回避、またはより一層明確には放棄を正当化する理論、方法論の追求という形、対象の存在 (Wesen) への消極的な姿勢を取り続けて来ている。

併し社会学の対象、即ち社会は、自然科学の対象、いわゆる所与のものとは違い、人間自らが生み出して来て、今尚生み出しつつある活動そのものである限り、社会学ではこの対象の存在 (Wesen)こそが問われ追求されるべきである。それ故この「存在 (Wesen)」について論ぜねばならないが、これは狭義の哲学領域に属するため、ここではこの「存在 (Wesen)」への接近を放棄することによってこそ、社会をト

ータルに把握しようと積極的に主張するルーマンの社会学理論の「理論要素」として、特に脱存在論的性格を示している「歴史」概念、従ってまた「時間」概念について考察検討することにする。

2 ルーマンが問題にするこれまでの歴史把握

1) 社会学にとっての歴史についての一般的見解

歴史は社会学にとり一般的には隣接諸科学の一つとみなされているが、その場合その歴史は社会学にとってというよりも、実の所は社会学者にとってというのが正当であろう。というのもまず第一に歴史は社会を追求する際の、その社会学者の社会観と直接結びつく歴史観として存在するからである。如何なる歴史観をとるかが、社会学者の社会研究に大きな影響を与えており、時には如何なる歴史観をとるかは、研究そのものよりも、研究者自身の社会的存在状況や、彼の人間観、世界観によって支配されもしているのである。それ故社会学上での論争も、つまるところは社会学者の歴史観、更には人間観、世界観、従って一般にはイデオロギーといわれるものをめぐってなされていることにさえなる。要するにこの場合、歴史は社会学の隣接科学というよりも、社会学以前の研究視点や立場、価値観 (Value orientation) を決定するものとしてある。併しそれに対し歴史は現実の社会の変動推移を把握するために、絶えず参照として取り上げられ、みられ、現実社会研究の正当性の保証根拠づけの材料とされており、その限り歴史はまさに社会学の補助科学として、飽くまでも外的な隣接科学である。併しこの場合でさえ、材料として取り上げられ、参照とされる歴史は如何なるものか、この点に着目すれば、問題は第一の観点、立場としての歴史観にゆきつくことになる。如何なる歴史が補助とし

て、如何ように取り上げられるかは、所詮、研究者自体の観点、価値観によっているからである。それ故ここで歴史に対して、社会学を非歴史化、中立化するという、第三の接し方が登場する。社会学を、方法論上、自然科学と同様にみなし、展開している、いわゆる実証主義がこれである。ここでは歴史は歴史として最早正当に取り扱われず、ただ社会的変動を示す時間的指標だけが重要となり、これは丁度自然科学における実験で時間的変化が計測上の指標として重視されるのと同様である。併しこの非歴史化、中立化はそれ自体、現存の現実社会をそれとして肯定 (実証) するという、極めて歴史的思想性をもった立場にあり、歴史からそれ自体免れえていないのである。要するに歴史は社会学にとり、ただ単に隣接科学として外的にありえず、社会研究自体が歴史的なこととして、歴史と内的に分離し難く、連関しているのである。そしてこの点に関して注意されるのは、歴史を社会学の「理論要素 (Theoriekomponente) として」考える可能性がより一層目立って来ている¹⁾とみなし、自らも「歴史を取り入れる状態にある理論性向を通して、理性啓蒙を克服する」「社会学的啓蒙」を主張するルーマンの歴史に対する姿勢である。では彼のいう「歴史を取り入れる理論性向」とは如何なる性向であり、またどのように歴史を取り入れるのかが問われねばならないが、そのためには彼自身行なっている、これまでの歴史把握思考の批判的検討を追考しておく必要がある。

2) M. ウェーバーの歴史把握思考について

ウェーバーの場合、「現実」はそのままでは「歴史」でありえず、ただ「永遠に向って限りなく流転する」「測定し難い」「無意味な」「生起の流れ」であるにすぎず、『現実』を真面目に『無前提的』に認識しようとする企て²⁾の成

就しうるものは、ただ「無数の個々の知覚に関する『存在判断』の混沌」のみであり、我々にとり「知るに値し」「因果的（歴史的—筆者）説明の対象となる」のは「我々が現実になづくに際して抱きもつ文化価値理念に関係する」「個性的現実の一部分」、即ち「常に無限に多様な個々の現象」のうちに「我々が一般的文化意義を認めるところの側面」のみである²⁾。つまりそれ自体としては無意味に存在する無限に多様な個々の現象のうち、或る文化的価値観点に基づき選択され、秩序づけられた一切断像である。ルーマンの場合は、その思考はウェーバーのこの思考と類似的であることが先ずみられる。

彼の思考において先ず重要なのは「複雑性 (Komplexität)」と「可能性」であり、世界は一つの定式化された必然性によって、今ある如く在るのではなく、多様な可能性を有し、それ故選択によっては別様にもありえた³⁾如き、多様に可能な出来事の、それ故不確定性＝偶然性 (Kontingenz) に満ちた総体である。それ故いま在る世界、歴史はこの複雑性の中から一つの可能性として選択され、切り取り出されたものであるに過ぎず、「それ故歴史的出来事はその純粋な事実性や単なるその事実的過程の連鎖のなかで重要 (relevant) なのではなく、その選択性の中で重要なのである⁴⁾」。しかしこのウェーバーとの類似を示す選択に関し、それが他の可能性にではなく、或る一つの可能性に何らかの意味を発見し、構成することということによって、より一層その類似性を強めるようにみえるが、かかる意味発見や意味構成は価値判断でもある限り、「神々の闘争」とウェーバーが名づけた価値観の対立抗争は避けえず⁵⁾、この点でルーマンはウェーバーの「価値自由 (Wertfreiheit)」に関し、それも「ひとつの価値である⁶⁾」と積極的に捉え直し、多様な価

値観点と、それに基づく多様な選択の可能性、従ってこの選択を可能ならしめる「地平」として広がる世界の多様な可能性による複雑性を彼自身の歴史把握理論の基礎に据えることによって、「歴史的現実性 (historische Realität)」とは「構造化された不確定性 (strukturierte Kontingenz) である⁷⁾」とさえ主張するのである。つまり彼にとって重要なのは、この不確定性を構造的に生み出している構造であり、それは、歴史の因果過程把握での一義的、決定論的誤りはそこにこそあるのだとされる原因概念に代えて、ウェーバーにおいても考慮されていた「可能性の地平と現実の差異⁸⁾」の概念を、差異は複雑性を異にするシステムやその周界 (Umwelt) の様相、また両者の相互関係構造の様相に従って、多様に生じてくるとする様相理論に従い、「不確定性 (Kontingenz)」概念でもって置き換えるところにみられるシステム構造であり、これはまた構造主義を代表する一人、アルチュセールのいう矛盾の重層性構造に対して云われるものである。こうして「すべての選択性、つまり事実に関するすべての出来事は、どのような過程によってであろうと、そこから出来事が選び出されるそうした可能性の地平を条件づけているシステム構造に依拠していることが歴史理論にとり明らかになる⁹⁾」という彼は、歴史理論も、他の如何なる理論と同様、「学問の価値自由として正当化される¹⁰⁾」とするのである。

3) ヘーゲルの歴史把握思考について

ヘーゲルの把握した歴史は、今では周知の思想とさえなっているが、絶対精神の現実への他在化、現象としての世界精神の、人間を介しての自己実現史である。それ故この歴史把握への批判はこれまでのところ、二つの側面に関してなされて来たといえ、その第一は、歴史の展開

運動の主体が自己実現の主体としての絶対精神、または世界精神であるという点に向けられており、この場合、更には歴史の主体としての人間を強調する如く、人間主義的、実存主義的にヘーゲルを解釈する立場と、ヘーゲルの歴史観を「逆立ち」の歴史観とみなす弁証法的唯物史観の立場に分れ、その第二はこの自己実現運動を貫ぬいている弁証法論理そのものに向けられ、これも質と量、本質と現象、同一性と差異、矛盾・対立などの種々のカテゴリーや、存在と非存在の、また連続と非連続の止揚的統一という論理そのものに向けられている。そこでルーマンのヘーゲル批判をみると、それはこの二つの面に向けられており、それ故先ず第一の点から彼の批判をみてゆくと、彼は歴史を「精神史的事実史」と語る歴史主義について、それは「一定の保たれた時間を前提」とし、この「不変前提は誤り」である故、「対象を見誤る¹¹⁾」とする。要するに自己実現する絶対精神、または世界精神の「一貫した普遍史、或いは世界史は存在しない¹²⁾」と彼は主張し、ヘーゲルの歴史観を拒否する。では現実における諸行為の主体としての人間の歴史を、人間主義、或いは実存主義の立場に立つ者と同様に、彼は主張するのかといえば、否である。彼は「主体は決して一切の付属物をもった人間（または非人間——精神や物質（筆者）——）ではない」といい、その「人間化(Anthropologisierung)」を、更には「社会学化(Soziologisierung)¹³⁾」を拒ける。そしてこの主体概念の廃棄問題に関して、認識論上の「カント的転換¹⁴⁾」は今なお不十分であるという。即ち主体の主体性根拠は、カントにおいては、多様な事柄の把握における統一性構築能力のうちにあるが、この統一性こそがまさしく複合性(Komplexität)であり、その限り「主体という術語が云い表わしているのは、主体それ自体の中にも、また同時にその

客体の中にも見出される複合性の問題を個々の人間が解決する際の形式」であり¹⁵⁾、それ故主体の問題は複合性の問題であり、主体は多様な分化された機能を「包摂する方式¹⁶⁾」に他ならず、これが「象徴化」され、「不変的に存続する¹⁷⁾」ものとして「実体化」されて来たのであるとルーマンは批判し、これまでの主体概念に執着したアプローチによる社会学についても、それは「その認識論上の先決条件や人間を実体化し、いわば具象化している」故、「その認識論上の先決条件を満たさず、人間を人間としての確に把握しえず」、「その点で社会学理論として不十分¹⁸⁾」であると主張し、主体概念の廃棄を申し立てる。併しこの申し立ては同時に実体概念廃棄¹⁹⁾の申し立てでもあり、このことは以上のことから明白であるが、同時に次の第二の批判、即ち弁証法論理そのものの批判にもつながる申し立てである。

そこで弁証法そのものに対するルーマンの端的な批判を引用すれば、次のようである。「弁証法は時間規定も時制規定を知ることなく、また過去の地平と未来の地平とを、今日の社会的体験と行為に対し適当な方法で分化させることもないという理由から、それ自身歴史そのものの過程理論として役立たない²⁰⁾」。これは云い換えれば、運動の開始、それ故社会過程の開始は、直接態の「未規定性」、或いは即自且対自態の「矛盾的規定性」のなかにあり、これの「否定」によって運動が始まるというのが弁証法であり²¹⁾、このように「即自的(sachlich)な矛盾から時間上の発展を推論することは……当然のことながら……論理的に根拠薄弱である²²⁾」という批判である。それはヘーゲルの「始源論」、「存在論」に専ら向けられている。ルーマンにとっては、多様な可能性から選択されて、いま存在するものと、選択されずに、いま存在しないものの、「存在と非存在」が問題

なのであり、これは、彼が社会学の再建のため基礎概念として重視する機能概念を、同じく重視して来たこれまでの機能主義社会学でさえ、弁証法と共有しているという、存在論的前提の排除こそが彼にとり課題となるからである。

彼が批判する弁証法の存在論的前提とは、「存在するもの」は恒常的に「非・非存在である実体として (als Substanz, die nicht nicht ist, ……)」²³⁾自己同一性を保持している、と解され、それ故「存在するものは、それが自己自身に対し矛盾しているならば、つまり存在と非存在の間の問題として未解決のままであるならば、真に、また恒常的に存在しえない²⁴⁾」という思考であり、この前提に基づく限り、存在、非存在間の問題解決の問題性は、存在が自己の相反するもの、アンティテーゼとしての非存在を経て、自己を回復するジンテーゼへの道を辿らなければならない、とするところにあり²⁵⁾、かかる弁証法は「まさに反省の論理に従って、概念上の諸規定が処理されていく過程」として、「自分で自分自身を……措定してしまったが故に、時間問題を主題化できなくなっている」ため「否定されうるものとなる²⁶⁾」と彼は主張するのである。

4) K. マルクスの歴史把握思考について

ルーマンは「社会学の対象は歴史的」であり、「それは対象が時代のなかに存在しているという意味においてだけではなく、対象がその秩序において自らの歴史を前提にしなければならないという理由からである」といい、その限り、なお反省検討の余地はあるとしながらも、「社会学は自分自身を歴史的な、時代に拘束されたものと理解し、この理解をその概念に反映させなければならない²⁷⁾」ことを暗に肯定、主張している。事実、彼は古代における社会を政治的に構成された社会として捉える把握から、

近代における社会を「経済化の諸徴候の増加、集中」する社会として捉えるに至る近代「社会概念」の推移変化を指摘し、「倫理的、政治的伝統に対する新たな経済的社会構想の成就が進歩の象徴のもとに実を結んだのは何ら偶然ではない²⁸⁾」という。そしてこの点で彼は、今なお論争され続けている、これまでの市民社会論のうち、マルクスに始まる市民社会論が最も大きな影響力をもっており、それは、その市民社会論が「社会概念を総体として定式化し、しかも経済社会の歴史的に現存する問題に関係させて、確実に捉えている²⁹⁾」からであり、更にかかる把握は、マルクスが存在論的形而上学的前提のもとで真理を求める努力、直接知に対し、近代に至って確定され、いわゆる「魔術からの解放」といわれる方法論、即ち「論理学と経験的検証の方法」に従ってなされている³⁰⁾からであるとみなし、この点でマルクスは、後世の社会学者に広範囲に渡る影響を与えた「歴史的立場」に立っていると評価しているのである。

併しそれにも拘らず、ルーマンは同時に、「マルクスが利用しえた過渡期状況において、市民社会を完全に説明しえたが、その市民社会の基礎次元のすべてにおいて、過渡期の余りにも具体的な光彩から、誤って説明している³¹⁾」とみなし、マルクスの歴史把握を批判するのである。つまりマルクスにおいては「経済の優位は即事的・有意味的な社会構造の次元で、唯物論的に基礎づけられた欲求システムの優位」となり、それ故「社会的に普遍的な規定」としての「広範囲な概念」である「生産という特別なカテゴリー」で、ただ「部分現象 (ein Teilphänomen)」のみが捉えられているにすぎず、「市民的なもの」も、具体的には「所有権」でもって表示される「階級」と同一視され、「進化 (Evolution—発展ではなく、このようにルーマンはみている)」も「都度々々前もって勝

ちとったものを次の状態で止揚するという、即ち規定されたものとして否定し、そしてその規定機能のうちで保持するという史的弁証法的合法則性 (eine historisch-dialektische Gesetzmäßigkeit)」とされている³²⁾点にこそ、マルクスの誤りがあるとルーマンは批判するのである。

こうしてルーマンのマルクス批判をみる限り、それは、マルクスが存在論的形而上学を前提とした思考を打破し、「科学的方法論」を要請した点を十分に評価した上で、それにも拘らず唯物論という存在論 (物質的) の立場に立ち、また弁証法論理に従ったことで、既にヘーゲルに対する批判におけると同様、存在論と弁証法に対する批判としてなされているのである。

3 ルーマンにおける「歴史の中立化」

こうして次に問われねばならないのは、ルーマン自身の歴史概念、厳密には彼が「社会学の理論要素としての歴史³³⁾」という際の歴史概念についてである。併し彼がこのようにいうとき、彼が念頭に置いているのは機能主義社会学の「非歴史的思考」傾向であり、これを理性「啓蒙的傾向の継続と捉える」のは「性急である³⁴⁾」と彼は批判する。彼によれば「社会学の非歴史的思考」、「意識的な歴史からの断絶」は「むしろ歴史を取り入れる理論性向 (Theorieansatz) を通じて」克服されねばならず、彼の学問的努力はこの「克服」に向けられているのである。

彼のこれまでの機能主義に対する批判は、以上においてみられた如く、それが存在論的前提に未だなお基づいている点にあるが、その限り彼は徹底的な存在論の排除、廃棄を社会学に要求する。これは云い換えれば、社会科学の思考における実体的な、物質的な、または主体とみ

なされる精神的なものの一切を捨象し、「機能」、「機能性」のみを、「純粹に」と云いうる程に、抽象することであり、それ故彼は、T・パーソンの「構造—機能的システム理論」に対しても、それにおいては「特定の」「与えられた」「諸構造をもつ社会システムを前提」とした上で、「システムが継続的に保持されるために、どうしても必要とされる機能的な働きが問われ」、それ故「構造形成の意味、否、システム形成の意味一般を問う可能性³⁵⁾」が奪われてしまっていると批判するのである。「社会システムの存続に貢献している働き」と考えられる「機能」が彼にとり問題となるのである。

彼がここで問うているのは「因果論的機能主義」或いはその「機能」概念である。「社会システムの存続」「安定」にとり、どのような「用件が動機として、つまり充足行為に対する原因として因果的に有効になる³⁶⁾」のか。これがこれまでの機能主義理論の課題であり、この限り存続する社会システムは「本質恒常の形 (Form von Wesenskonstanten) ³⁷⁾」に固定され、それ故システムの存続安定性は、仮えそのために諸々の原因のもとでの因果関係の複合的結合が補助的に作用していると把握されても、究極的には「一原因—結果の関係に還元される」というよりも、むしろこの因果関係自体が、既に与えられたシステムの存在によって、即ち結果が決定していることによって初めて、成り立ち、「法則として定式化されうるにすぎない³⁸⁾」ことになる。これは明らかにルーマンがその排除、克服を主張しているところの存在論を前提とした思考であり、それ故当然ながら、彼はこうした存在論的前提の枠内にとどまる因果論的機能理論の克服を目指し、それは近代初頭以降明らかになったとみられる思想、即ち「いかなる因果主張もさまざまな観点で無限論の示唆を含んでいる³⁹⁾」ことに着目すること

によって進められる。

彼が指摘する「無限論の示唆」とは「どのような結果にも限りなく多くの原因があり、またそれぞれの原因には無限に多くの結果があり、それ故にかなる原因も際限なく他の原因と結びつき、或いは他の原因によって置き換えられるということ⁴⁰⁾」であり、彼はここでみられる無限に多様な因果的交差結合、または原因の多様な置き換えを可能ならしめる機能について、論理学における「不完全命題」の機能を説明することによって、定式化する。即ち不完全命題「……は青い」の欠落した不完全部分に「空」、「私の自動車」、「すみれ」などを挿入しようと、この不完全命題の機能は遂行されているのであり、このことは、この命題が、その欠落部分の補完によって真の論述となりうるという「一定の可能性から成立している一つの限定された比較領域⁴¹⁾」としてあること、つまりこの命題は、その機能の点では、「空」、「私の自動車」、「すみれ」の何れをも、挿入に対する「等価の充足性」として比較考量する領域としてあることを意味している。それ故この命題の機能は「命題がその真理価値を変えることなく、どのような挿入値によって完全なものにされうるのかということを決めるにすぎない」「規則」として、「一つの抽象」であり、こうしてそれは「純粋な機能」として、「原因となるべき作用ではなく、むしろ等価の諸作用の比較範囲を組織化する規則的図式である⁴²⁾」と定式化される。

こうして因果論を存在論的に把握することは、ルーマンにおいては排除されるが、それは因果関係の、それを成り立たしめる諸要因の「等価充足性」に依拠する多様な可能性を指摘することによってなされる。それ故ここから直ちに云われうることは歴史把握における因果理論の克服であるが、同時に考えられうること

は、歴史過程にも多様な可能性が、しかもその選択の多様な可能性がありうるということである。「歴史の進行は因果法則的にも、企図された可能性の充足として目的論的に理解することもできない」とルーマンはいい、それに続けて「その都度々々現実化される構造、あるがまゝの状況が、可能性の地平と並んで (neben dem Möglichkeitshorizont), 絶えず自らの歴史を自己選択するに到る⁴³⁾」という。ここで重要なのは、最早因果性ではなく、その都度々々の構造、状況が可能性の地平との関わりにおいて自らの歴史を自ら選択することである。それ故「歴史的出来事 (Historische Ereignisse)」は、その純粋な事実においてや、単なるその事実的過程の連鎖において (in ihrer puren Faktizität und……in ihrer faktischen Verlaufsverkettung) 重要 (relevant) なのではなく、その選択性において (in ihrer Selektivität) 重要 (relevant) なのである。⁴⁴⁾ 併し「歴史的状況は、事柄を別様に理解し、或いは別様に欲する可能性が常にさまざまな方向において存在する故、不完全決定されるのであり、そこで現状 (Status quo) はただ選択として主張されうるにすぎない⁴⁵⁾」ことになる。即ち「選択」は絶対的に「確定的」でありえず、むしろ或る特殊な「縮減」としての不完全、不確定な選択でしかありえず、こうして「選択」に関して「不確定性⁴⁶⁾」、「不完全決定」がいわれもするのである。

そこでルーマンにおいては自明なこととなるが、歴史は一義的、一元的なものと解することは拒けられる。「過ぎ去った諸々の現在」においても、当時の行為者は多様な可能性に富む複雑な「周界 (Umwelt)」との関係において、一つの選択をなすことにより、歴史的な出来事を展開せしめていた限り、その選択が別様になされていたならば、歴史も別様に展開しえてい

た筈である。それ故「科学的な歴史研究」は当然、「過去に関する現在 (die Gegenwart von Vergangenheit) にではなく、過ぎ去った現在 (vergangene Gegenwarten) にたずさわる」研究として、自らを過ぎ去った現在に置くことによって、「過去 (Vergangenheit) を当時の現在 (damalige Gegenwart) として解明⁴⁷⁾」することに努めねばならないが、ルーマンはそのため、「研究は自己の研究関心に準拠して、選択的に自己を対象に合わせ」ねばならず、それは「可能」であるといい、「この選択は危険を冒すが、……客観的研究の前提条件である⁴⁸⁾」という。そしてこの研究がまさに客観的、科学的であるために要求される「合理性」は、「複雑な行為システムの水準においてのみ」、即ち「システム合理性」としてのみ獲得され、この合理性の獲得のために決定的に重要であるとされるのが「比較の視点の選択 (die Wahl des Vergleichsgesichtspunktes)⁴⁹⁾」である。そしてこの視点の選択と関わるものとして取り挙げられるのが「窮乏 (Knappheit) の構想」である。ルーマンが「窮乏」を論じる場合、何よりも先ずマルクスに始まる歴史把握を批判の対象としている。即ち「窮乏もまた歴史を作るとマルキストはいう」が、これに対し彼はサルトルが示した「窮乏と不確定性との連関の分析」を援用して、窮乏は「不確定性の形式 (Kontingenzformel) として一般化」され、また「貨幣のメカニズムを通じて、所得状況、需要、および現存している財の量」から独立され、そのことによって「歴史を中立化する要素 (geschichtsneutralisierende Faktoren) が活動し始める⁵⁰⁾」といい、マルクスおよびマルキストにとって重要な問題「貧困 (窮乏)」に関し次のようにいう。即ち「生産事象と所得事象が確かな資産状態にどのような裂け目を作ったのかということが、現在の操作にとり、もはや

意味をなさないならば、生産事象と所得事象は過去 (Vergangenheit) へ突き落され、関連ある歴史 (die relevante Geschichte) から放免される⁵¹⁾」というのである。これは、生産による資本の蓄積と搾取、資本の分配の不平等として作り出されている資産状態における裂け目、矛盾・対立が、現代の操作、即ち大量生産・大量消費に由来する豊かさの幻想・意識操作や諸政策により見えなくなっている限り、この搾取、不平等という生産と所得における事象は過ぎ去ったこととして、既に片づいてしまっており、関連ある歴史には関係ないものとされる、ということである。経済が優位的である市民社会は最早歴史を必要とせず、「歴史に拘束されることなく、自由に構想しうる潜勢力概念 (geschichtsfrei konzipierbare Potentialbegriff) を獲得」しているため、自己操作することができ、そのために必要とするのはただ「貨幣、所得、契約⁵²⁾」だけであるという。実際彼は「バルト海の休暇」よりも「バハマの休暇」の方が価値が高いというような「消費事象のイリュージョナルな価値引き上げ」、「価値序列化」によって「経済システムは包括的な支配に必要な貨幣の見積りを自ら創り出している」のであり、そこに人々は時間次元 (即ち未来) が先導していることを見出す⁵³⁾とさえいうのである。こうしてルーマンによれば、経済は需要という自然欲求の内在的論理に従うのではなく、むしろ需要という自然欲求が「経済の内在的論理に従い」、「そのもとで矛盾する諸要求を処理することができ、また時間的、事物的、社会的分配問題の意義を明らかにしうる」「システム固有の問題図式として」「窮乏を経済機能が生み出すのであり⁵⁴⁾」、その限り「窮乏」はその都度々々の状況に応じて諸欲求を処理するための、「一つの抽象的な比較の視点 (ein abstrakter Vergleichsgesichtspunkt)⁵⁵⁾」であ

り、そしてこれはまた、多様な選択肢に満ちた複雑な可能性地平からの選択を可能ならしめるための、方法論的に設定された技術的概念でもある。彼によれば、歴史は可能性に富んだ周界との関わりにおいてなされるシステムの自己選択であり、分化が高度になされ、ばなされる程、周界、システムはともに複雑になり、それ故選択もより一層不確定性を増してゆくと考えられ、その限り歴史は益々一義的に固定化、確定化されえず、様々の観点からの把握が肯定されねばならないことになる。つまりウェーバーの「価値自由」が「一つの価値」として積極的に捉えられ、「歴史の中立化」として展開されるのである。彼のいう「歴史の技術的中立化」とは「過去 (Vergangenheit) に対し肯定的にも否定的にも立場をとることができるような」「過去に対する原理的に二面的な関係 (ein prinzipiell ambivalentes Verhältnis)⁵⁶⁾」を作り出し、「その関係の枠の中で時間的出来事を選択肢がさまざまな意味を獲得できる⁵⁷⁾」ようにすることである。しかもこの中立化は選択されない選択肢の中立化でもあるのである。選択されない選択肢は取り消される (Vernichten) のではなく、選択という括弧から外にはずし置かれ (ausklammern) たまま維持され、「別様の選択の出所 (Woraus), つまり世界⁵⁸⁾」, 「潜勢力の背景 (der Hintergrund von Potentialität)⁵⁹⁾」として保持され続けるのである。

4 ルーマンにおける「時間」の技術的形式化

以上から知られる如く、ルーマンによれば歴史とは複雑性の縮減ではなく、「すでに縮減された複雑性 (die schon reduzierte Komplexität)⁶⁰⁾」である。そこでは選択された選択肢の背後に、選択されない選択肢が多様な可能性として限りなく保持されたままであ

り、それ故歴史研究はこの複雑性に改めて立ち向い、新たな選択による別様の歴史像を描きうることになるとする。併しこの研究、従って選択は、既にみられた如く、常に過去におけるその当時の現在という時点からなされねばならず、その当時の人々が彼らの現在という時点において、どのような選択をしたのか、また何故にその選択をしたのかを、自らの課題とせねばならない。それ故ルーマンはこの点に関し、「個別歴史の研究目的のためには、現在の過去 (die gegenwärtige Vergangenheit) の中に過ぎ去った現在 (vergangene Gegenwart) を選出しなければならない」といい、続けて「それと同時に未来という反地平がいろいろな意味で活動し始める⁶¹⁾」というのである。つまり選択は、その都度々々のいかなる現在における行為者にとっても、いかなる未来を選択するかが重要であり、その限り都度々々の「現在に対して無条件の優位性をもつのは、もはや歴史の既に縮減された複雑性、歴史の既に締め出された他の諸可能性ではなく、むしろ未来であり⁶²⁾」、こうして「選択の連鎖が強化する終始一貫した直線はもはや過去から現在に走るのではなく、未来から現在に向けて走る⁶³⁾」とルーマンによっていわれる。そこで選択がなされる夫々の当時という時点は、常に現在といわれる様々の時点 (Zeitpunkt) の系列を作ることになるが、この時点系列は飽くまでも選択者の主観性に基づく直接経験上のものとして、客観的に過去、現在、未来として分節されて、科学的な歴史を形成するものではない。「そこでは遠い時間は、本当の意味で時間ではなく、むしろ暗い地帯 (Dunkelzonen) であり」、「数多くの主観においては、経験のパースペクティブは、現在においても、直接見通しのつく未来、もしくは過去においても、不可避的に拡散し、加えて一つのより広い時間地平で社会的に均質化」

され、それ故「その社会には、何ら一貫した普遍史あるいは世界史は存在しない」⁶⁴⁾ことになる。要するに此处にあるのは、選択する行為者＝主観自体の内部に構成された「内部地平」と、その外部に開かれている「外部地平」、即ち「システムの複合性」と「周界の複雑性」の全体、「可能な出来事の総体」⁶⁵⁾、即ち「無規定のままの複雑性」としての「世界」でもある「一つのより広い時間地平」である。そしてこれは有意味な出来事選択の可能性の、しかも「限りなく続く時点系列として意識される」⁶⁶⁾限り、「事象として有意味に構成された世界から切り離して抽象化される」ことによって、「時点の抽象的連続態 (ein abstrakter Kontinuum von Zeitpunkten)」⁶⁷⁾として、それぞれの「現在の時間地平の中に……現前 (präsentieren)」する「全体時間 (die gesamte Zeit)」⁶⁸⁾としての「世界時間 (die Weltzeit)」であるとされる。

併しこのようである限り、有意味的出来事を選択の個性性、歴史性は欠如したままであり、未来に向って選択を行なう政治、経済、法、教育、社会等々の諸システム並びに心的システム（個々人）の様々のシステム史の個性性や差異や相互関係はどのように規定されるのかが問われる。そこでこれに対しルーマンは先ず、今述べられた「時点の抽象的連続態」、即ち「世界時間」は、各システム史を相互に関係せしめ、「対等並列化 (Koordination)」を可能ならしめる条件、1)「自己或いは他者の一定の運動とその速度に左右されない」ための「同質性 (Homogenität)」、2)「非可逆的経過にかかわらず、知的に逆計算しうる」ための「可逆性 (Reversibilität)」、3)「日付けをつけることと因果性を通じての規定可能性 (Bestimmbarkeit durch Datierung und Kausalität)」4)「さまざまに広がる時間区間を比較する条件

としての移行性 (Transitivität als Bedingung der Vergleichs verschieden liegender Zeitstrecken)」を満たし保証する「それら相互媒介のより抽象的な形式 (die abstraktere Formen ihrer Vermittlung)」として、あらゆるシステム史に広がり渡り妥当するという。それ故世界時間は「あらゆるシステム史を越えて構成された抽象的時間」として、「世界地平という一つの次元」⁶⁹⁾を形成し、そのことによって更に「その時々の実際のすべてのシステム過程を同時に走らせる——世界大的コミュニケーションの可能性の一つの条件」でありつつ、「同時に、すべての意思疎通的に達成できる人間の体験と行為の包括的システム (das umfassende System)の」、即ち「世界社会 (die Weltgesellschaft)のシステム時間 (System-zeit)」⁷⁰⁾であるとみなされるが、ルーマンは世界時間をこのようにみなすことによって、諸システム史における現実的規定性に関する問題に対し、解決の方向を与える。併しこれは明らかに一つの「メタ理論」といわれうるものであり、これについては後で改めて論ぜられねばならないが、このような方向提示のみである限り、彼自身が主張するその都度の現在、その当時の現在からの歴史把握の可能性はまだ満たされない。時間に関する彼による第二の問題点は此处から生じるのである。

事実「どの時点が過去 (Vergangenheit)、現在、或いは未来として作用するのか」、「どのような時点がその都度、過去、現在、或いは未来に帰属されるのか」の「統一的規定」を「確定する (festlegen)」ことは、以上の如く時間を「世界時間」、「世界地平」といわれる「抽象的な時点の連続態」として抽象的に構成せざるをえない「対等並列化要求 (Koordinationserfordernis)」とは別であり、そのために彼は「多重様相化 (Mehrfachmodalisierung)」或

いは「反省的様相化 (reflexive Modalisierung)」と呼ばれる「構造化技法 (Strukturierungstechnik)」の使用が必要であるという⁷¹⁾。

即ち時間は一般に過去、現在、未来の三つの様相で考えられるが、歴史は都度々々の現在における展開過程として把握されねばならない限り、その当時の現在という時点そのものは過去、現在、未来という単純な三様相区分でもって把握されえず、それら三様相の夫々が時間内反省的に、更に様相化され、区分されねばならず、この点に関しルーマンは「現在的未來 (eine gegenwärtigen Zukunft)」は現実となった「未來的諸現在 (künftige Gegenwart)」よりもより多くの可能性を含む故、この両者を区別し、更に「未來的諸現在」、「現在的諸現在 (gegenwärtige Gegenwarten)」、「過去の諸現在 (vergangene Gegenwarten)」、即ち「過ぎ去った諸現在」を区別し、尚その上「過去性 (あえてこのように訳す—筆者) の現在 (dia Gegenwart der Vergangenheit)」、即ち歴史」は「過ぎ去った諸現在」とは別のものであるため、これら両者を区別することによって、「現在的現在」と同時的であり、また「過去性の現在、即ち歴史」と同時的である我々のいわゆる「現在」も、「過ぎ去ったその当時の現在」が「その当時の現在的過去 (eine damals gegenwärtigen Vergangenheit)」と「その当時の現在的未來 (die damals gegenwärtigen Zukunft)」をもつ限り、「過ぎ去ったその当時の現在」の可能性として多様にありえた「未來的諸現在 (künftige Gegenwarten)」の一つであり、こうしてこの「過ぎ去った現在」の中に「現在的現在」である我々の現在とは異なる別の可能性の条件を見出すことが出来、それ故様々な結果をもった歴史、即ち「過去性の現在」がありうることを、従って歴史はこの「過去の現在」と「現在的現

在」という二つの現在から検討されうることになるという。そしてまた逆に未来、即ち「現在的未來 (eine gegenwärtigen Zukunft)」に存在すると予想される現在、即ち未來的諸現在 (künftige Gegenwarten) にとって、我々の現在、即ち現在的現在 (gegenwärtige Gegenwart) は過去の現在、即ち過ぎ去った現在 (vergangene Gegenwart) としてあることになり、それ故この未來的現在は、それからみれば「過ぎ去った現在」とみられる我々の現在、即ち現在的現在における選択の多様性によって多様に存在しうるものとして考えられ、従ってこの多様にありうる未來的現在のうち、如何なる未來的現在を選択すべきか、或いは選択しうるかという計画のために、現在的現在を未來的現在の過去として、その可能性の地平から分析することの必然性が明確になり、こうして「現在」についての「評価 (Ansatz)」でもって、「諸可能性の計画のシステム構造的な着手状態 (die systemstrukturelle Ausgangslage der Möglichkeitprojektion)⁷²⁾」が決定されると彼はいう。要するに「過ぎ去った諸現在の歴史研究」において考慮されねばならないのは、その「過ぎ去った諸現在」とともに「その当時の現在的未來 (die damals gegenwärtigen Zukunft)」と「その当時の現在的過去 (die damals gegenwärtigen Vergangenheit)」という「三重の様相化 (Dreifachmodalisierung)」であり⁷³⁾、それを歴史研究の技法、即ち「構造化技法」として用いねばならないと彼は主張するのである。彼によればこうして——少々長い引用になるが——「時間の歴史化とは、人々がそこから出発しなければならない現在の二つの時間地平 (現在的過去と現在的未來) のなかにそれ自身の時間地平、即ち未來と過去をもった諸々の現在が再び姿を現わし、しかも……ただ受容力と関心展開の問題によって

のみ限定される反復可能性でもって姿を現わすことであり」、それ故「近代の『歴史意識』の特性」は「過去性の認識に関する特別な努力のなかにではなく、むしろ未来への特別な関心から結果として出てくる過去性の時間化 (die Verzeitlichung) の中に見出され⁷⁴⁾」, 「歴史的な出来事の個性性は」まさに「時間地平の、出来事に対する、しかも出来事を選択を構成する特別な配置」, 即ち「構造化技法」による「特別な配置に依拠している⁷⁵⁾」ことになるのである。所詮、彼によれば個々の歴史の個性性は、時間の多重様相化というこの「構造化技法」によるのである。

5 ルーマンの思考に対する批判的見解

ルーマンにおける「歴史と時間」に関しては、概括的ではあるが、以上の如く考察されたが、そこには幾つかの問題が含まれており、それ故それらの問題が検討されねばならない。

1) ルーマンの存在論拒否と構造化技法について

存在が意識を規定するとの如く、存在と意識の関係を規定したのはマルクスである。これに対しルーマンは、意識が存在を規定するとの如く、明確に否定的な態度を示しているといえることができる。即ち彼はその提示する歴史把握において、経済事象、生産関係が土台であるとする唯物史観に対抗し、それを歴史把握にとっては他の諸システムと、機能的に等価の位置に並んで存在する一つのシステムであるとの如く、相対化するのである。つまり彼によれば各システム相互の関係は、例えば政治システムにとり経済システムが、また経済システムにとり政治システムが夫々不確実な複雑性をもつ周界の中に組み入れられる如く、単に問題としてのシステムと、他の諸システムを包み込む周界との関

係としてのみ把握されるのである。併し夫々のシステムは、その限り周界の中に包み込まれているものとしては、実質的に不明確なまゝの状態であり続ける。しかもシステムと周界は、分化が高度化すればする程、システム内の複合性も、周界の複雑性も互により一層増大し、その点で両者は「対応の法則 (das Gesetz der Entsprechung)⁷⁶⁾」に従っているとされるが、そうである限り両者の関係の不分明さ、不明確さも益々増大することになる。彼にとっては無規定性、不確実な複雑性こそが歴史把握における重要な概念であり、歴史過程の都度々々の「現在」における多重構造的把握の必要性を生起せしめるものでもあり、その限りではその無規定性、不確実な複雑性は認められようようにみえる。併しこの不確実性、複雑性は歴史の構造的把握上の必要性にとどまらず、むしろ逆に歴史把握における対象の構造的な不確実性を、従って歴史把握そのものの不確実性をもたらしことになる。或いはこの不確実性をもって、ルーマンは歴史の一元的把握の絶対化を避け、その相対化、中立化を可能ならしめようと主張しているのかも知れない。「価値自由 (Wertfreiheit) も一つの価値である」と彼がいうのも、こうした意味においてであろう。併し歴史把握において真に重要なのは、歴史把握の構造化ではなく、存在する対象の構造把握である。対象の構造が把握されねばならないのである。そこで彼のシステム理論において重要な意味を与えられている「分化」概念について吟味、検討することは有効である。

ルーマンは何故に分業について言及せず、「分化」のみを主張するのか、これが問題である。分業は明らかに存在する対象に密着した概念であり、そこには生産関係が含意されている。生産の発達展開に応じて、分業が展開するとともに、生産関係は益々複雑化していく。併

しルーマンはこうした対象の存在的関係を拒否する。というよりもこの分業によって顕在化した「階級」関係を否定し、こうした把握は、欲求という自然的、物質的なものに依拠した存在論に基づくとして排除する⁷⁷⁾。それ故彼においては、「分業」概念は退けられ、対象の存在性との関わりを取り去った、従って真には構造的ではない、平面的な分割である「分化」概念が導入されるのである。これは現実的事象の存在に関わるのではなく、意識のうちに取り込まれた存在のみを対象としている。彼が批判的に摂取している現象学的思考、特にフッサールの思考のノエスーノエマの関係が此処にあるのである。彼においては意識の括弧内に括られたもののみが対象としてあり、現実的事象の存在はその括弧の外にはずし置かれたまゝである。併し現実にはこの現実的事象の諸存在は相互に作用し合い、また意識に作用し、その結果意識の括弧内に括られた対象も、実はこれら諸存在の反映としてあり、こうしてルーマンのいう「複合性（複雑性）」や「不確実性」はこれら諸存在の構造的関係の反映を示す意識内の対象である。「複合性（複雑性）」はただ「不確定」、「無規定的」であるから云われるものではない。むしろ対象の存在の複合的な関係構造が明確にされてこそ、初めてそれは複合的であり、複雑であると真にいわれうる筈である。併しルーマンでは逆である。彼のシステム理論、それ故歴史把握において切り札のように用いられる「不確定性（Kontingenz）」は、歴史研究において歴史展開における構造的複雑性を指摘する点では、仮え認められうるとしても、それを研究対象の存在にまで一義的に適用することは誤りであり、それは彼のいわゆる「構造化技法」によっているといえる。

彼の「構造化技法」は歴史過程のその都度の現在を構造的に把握するために示された、時間

についての反省的な多重様相化である。併しそれは原理的には飽くまでも認識論上の方法的技術にすぎず、対象の存在そのものの構造とは別の次元で展開されており、その別の次元とは、彼自身のいう「様相論理学(Modale Logik)」に基づく思弁的な論理的に「可能な世界」の次元である。「構造化技法」がまさに技法でありうるのは、この思弁的次元の論理的構造が現実に応用されるからである。しかも「様相論理学」はその成立からして、根源的には形式論理学に由来している限り、或る判断における概念の周延、不周延の関係、即ちその判断が概念の外延の一部分にしか及びえない場合、その概念は周延されていないという「周延則」に従って、その概念の外延の、その判断によって言及されない部分についての可能的言及、則ちその概念についての別様の判断の及びうる可能的諸世界が思弁的に論理構成されるのであり、その限りこの構成された諸世界相互の関係は平面的、並列的であるにすぎず、真には構造的であるとは云いえない。

併しルーマンはこの技法を我々の現実経験世界に適用して、それを解釈、説明し、我々の現代社会は経済システムの優位する高度に分化した社会である点に注目して社会把握を展開したのは——その自然的欲求に基づく理論のために——正当に把握しえなかったとしながらも——まさしくマルクスであったということにより、彼自身の把握の正当性を主張する。併し彼が経済システムの優位性を主張するとき、何に基づいて主張しているのか。事実としての経済の、大量生産・大量消費による高度発達、即ち物質的経済発展が彼の主張の前提としてあることは確かであり、これなくしてはかかる主張はなされない。即ち彼の注目する事実の存在が前提とされているのであり、この前提としての事実存在を意識の括弧内に対象として取り込み、この取

り込まれた対象、意識内対象を技術的にシステムとして構造化するのである。それ故ここで認識論上の避けえない問題が生じる。即ちそれは認識と存在の一致、不一致の吟味、検討の問題であり、認識が存在にどれ程一致しえているか、つまり存在をどれ程正しく認識しえているかは、常に存在によって決定されるのである。正しい認識をなしえたと思念しようとも、存在との関係においては、存在はその認識主観に対しては、それまでの客観、対象とは別の姿をもつ新しい対象として登場してくるのであり、こうしてそれまでの認識は吟味され、否定され、克服される⁷⁸⁾。その限りこの認識と存在は弁証法的関係にあるが、ルーマンはこの関係を退けもしている。彼にとって重要なのは何よりも「構造化技法」である。そしてそこにこそ彼のいう「社会学」の特性の理論的根拠があるといえる。

ルーマンは何故に歴史把握を問題とするのか。彼が歴史把握を問題とする目的は一体何であるのか。また彼が歴史過程における都度々々の「現在」からの把握を重視、強調するのは何故か。都度々々の現在から歴史把握をすることは、我々の現代にとっては常識でさえある。併し彼にとって、その当時の現在からの把握は、我々の「現在」の、従って我々の「社会」の把握の理論、即ち彼のいうシステム論的社会学理論に組み入れられるものとしてあるのである。

「歴史」は社会学の「理論要素 (Theoriekomponente)」として考えられているのであり、確かにこれは否定されえない。併し問題となるのは、彼の歴史把握理論であり、またシステム論的社会学理論であり、この点に関しては、既にみられた「歴史の中立化」の項における「窮乏 (Knappheit)」についての彼の解釈、把握がその問題性を端的に示しているといえる。そこでは彼は「バハマの休暇」の方が「バ

ルト海の休暇」よりも価値が高いという如き「消費事象のイリュージョナルな価値引き上げ」、「価値序列化」によって需要が、それ故「窮乏」が創造されること、従って「窮乏」は経済システムの内在的論理に従って、イリュージョナルな価値序列化を目指して、絶えず創造されることを強調するが、これは明らかに、消費の計画的・技術的操作拡大による資本主義的経済発展のより一層の高度化を企図したものであり、それ故彼においては、その反面において生み出されるところの、そしてマルクスによって究明された「相対的過剰人口」、失業や不安定就業による「絶対的窮乏」は全く無視されている。何れにせよ、彼によれば「窮乏は経済効率の上昇により減少するのではなく、逆に増大する⁷⁹⁾」、というよりも「経済効率が上昇する」ために「窮乏」は増大させられねばならないのであり、そのためそれは「経済機能」によって「システム問題図式」として生み出されるのである。これはまさしく経済優位の現代社会における、しかも「組織化された資本主義」社会における政策、計画決定の問題に対する操作技法であり、このためにこそルーマンは「構造化技法」を主張しているといえる。そしてこの決定のためには現代社会において過剰ともいえる情報の処理が極めて重要であるが、この点に関しルーマンは「或る一つの情報処理がいつ他のものと関連性をもって重要となり、決定に転化するか」、その決定のために前もってなされねばならない情報についての考慮、即ち「いつ、どのように決定されるべきかという特定の反省的先行的決定」は、常に「時間的、空間的隔たりの内部で」なされねばならず、この決定過程の形態的に外化されたもの、即ち「決定創出機関」として「官僚主義的決定機関」が存在するのであるとみなしている⁸⁰⁾。そこでルーマンの思考、それ故彼の主張するシステム論的社

会学理論は極めて技術的・官僚主義的であり、テクノクラシーの一環として、むしろそれを理論的に支えるものとしてある、というる。

2) メタ理論としてのルーマンの時間論について

ルーマンの思考は以上の如く極めて技術的官僚的である。併しそこには尚逆に非技術的・反技術的ともみられる側面がみられもするのであり、しかもそれは以上でみられた彼の「構造化技法」、即ち「時間の多重様相化」から見出されるのである。

彼によれば過ぎ去った歴史的事象は、常にその当時の、しかも「現在の過去」と「現在の未来」という二つの時間地平を、それ故三重の時間的様相をもった「現在」から把握されねばならないが、この把握が可能であるための条件としての時間の同質性、可逆性、日付と因果性による規定可能性、及び時間区間の比較条件としての移行性が成り立つために不可欠な操作的条件として「時間の抽象化、一般化」即ち均質的な時点の「対等並列化」が要求され、こうして「抽象的時点の連続態」が思弁的に創出され、それが「世界時間」、または「世界社会のシステム時間」とみなされるが、これは形式的には以上のようなとしても、内容的には「無規定的な複雑性⁸¹⁾」を含みもって広がる地平、つまりシステムと周界の何れもの複雑性 (Komplexität) を包括する世界として考えられもしているものであり、この「無規定性」こそが「現実性」であると規定されるのである。それ故彼にとっては世界の現実性とは、この世界の無規定性を指しているものであり、その限り世界の複雑性とそれに由来する選択の不確定性 (Kontingenzen) により歴史研究及び現実の社会把握において把握された事象以外になお多くのものが、別様の選択により、別様に把握され

うるとしても、背後に残されたまゝになっており、これら残されているものを包み込んでいるものとして背後に存在する世界こそが、抽象的に創出された「時点の連続態」である「世界時間」としての「世界地平」である。そこでこの「世界時間」はその抽象性によって、現実の歴史、ルーマンによれば諸システムの歴史を超えて、それらを包括する一つの次元を形成するものとしてあり、こうして彼においては歴史は三重の次元、第一には日常経験的な現実史の、第二にはこれこそ彼にとって重視されるシステム史の、そして第三には世界時間の三重の次元をなしているように把握され、これはまさしくメタ理論である⁸²⁾。これは嘗て現象把握に終始する自然学 (Physik) に対し、自然存在の本質 (ousia, Wesen) を探るべく成立した Meta-Physik に対応して、歴史及び社会の経験的実証的把握を目指す歴史学、社会学に対しその可能性の根拠を問うのである。実際彼は日常用語に関し、それは「反省的社会意識の錯綜した構造組織を模写することができる状態にある」として、日常用語の根底にある「社会的反省性」に関わる「メタ観点 (Metaperspektiven)」に言及し、「時制の反省性 (temporale Reflexivität)」に関連して「さまざまなシステムの時間地平をさまざまな時点へと高度に分化させ、また同時に終始一貫性に対する、また相互に交替し合う選択性の強化に対する高度な要求に焦点を合わせるメタ観点」が存在するといい、こうして主張されるのが、「時間の多重様相化」であり、またそのための「構造化技法」であり、それ故この技法に関わるものとして「世界時間」、「包括的なシステム時間」、「世界社会のシステム時間」と彼により、既にみられた如く、云い換えられる「世界地平」はメタ理論において抽象的に形成された概念であるという。併しこの「世界時間」及び「世界地

平」に関し、既に引用された彼の言葉に注意すると、尚一つの問題点が明らかになって来る。即ち「あらゆるシステム史に関する構成された抽象的な」「統一的に査定された世界時間はすべてのその時々の実際のシステム過程を同時に走らせる⁸³⁾」と彼はいい、また「世界地平」に関しては、それは「(システムの)内部の規定であろうと外部に対する規定であろうと、一切の規定を不確定なものとして現象せしめる世界地平 (Welthorizont, der jede Bestimmung nach innen und außen als kontingent erscheinen läßt) —傍点は筆者—⁸⁴⁾」という限り、彼は、彼自身拒否している存在論的領域に入り込んでおり、こうして自らその主張に矛盾、不整合を生ぜしめているのである。即ち「その時々の実際のシステムを同時に走らせる」のが「世界時間」であり、また「一切の規定を不確定なものとして現象させる」のが「世界地平」であり、かかる「世界地平」として、「すべての規定が不確定的な選択として見えてくる」ための背景としての「世界意識」があるという如く、「世界地平」は存在論における実体概念であるように表現されており、しかも存在論における実体的なものとして彼によって拒けられている認識主体の意識も、不確定な複雑性に満ちた「世界」を構成するものとして現われ、こうして彼自身拒けている存在論的領域に自ら入り込んでいるのである。

こうしてルーマンにおける歴史把握にとり重要な時間概念を検討することにより、それが極めて技術的、官僚的であることが明らかになるが、更にその背景にはメタ理論的思考があり、しかもそれを支えるものとして彼自身の、その主張に反した、存在論的領域への入り込みのあることが明らかになる。そしてこの存在論への入り込みという点では、彼はカント的な二元論の立場をとり、存在を不可知なものとして、認

識を超え出た次元に置きやるのである。彼が「世界地平」が超越的次元の「無規定性」としてありつつ、同時にその「現実性」を「現在」として持つというとき、彼はこの「無規定性」としての「世界地平」を、彼が批判的に問うことによって排除したヘーゲル弁証法における「否定」のエLEMENTに通じるものとして提示しているとみられる。ヘーゲルの場合、存在が否定を媒介として、自己実現する運動の境域世界、即ちその中で自己の他者と関わり、その他者による否定的媒介により自己を回復し、自己同一性を維持しつつ、自己を実現してゆく境域世界がELEMENTであり、その限りこのELEMENTは固定的ではなく、存在が他者と関わり、その否定的媒介により、自己の内実を豊かにし、高度化してゆくに依じて、量的、質的にも拡大、高度化する如く展開し、この否定的媒介という点において、このELEMENTは現実的である。そしてこの否定性が常に現在において「現実的」であるという点において、ルーマンはヘーゲルに通じているともいえる。併しそれにも拘らず、彼はヘーゲルと相異しており、それは彼においては「媒介」という思考が欠如しており、それ故彼のいう比較は外的なものである⁸⁵⁾ことによってである。勿論ルーマンも媒介についてその必要性をいう。併し彼の場合、歴史上の具体的な現実的諸事象を比較するために、外部からあてがい測定、評価するための、抽象的に構成された尺度としての時間、「抽象的時点の連続態」が要求されるだけであり、これは歴史研究における選択の多様性に関わるのである。即ち或る一つの実選択がなされるとしても、それは「……である限り」においてであり、他の「……である限り」においては別様の選択がなされるのであり、この点において彼は「カントの『……限り』の抽象化(“die Sofern” - Abstraktion)」を「機能的思考の特徴的標

識 (ein charakteristisches Kenzeichen)⁸⁶⁾として、自己の思考の中に組み込んでいるのである。そしてこのカント的「……限りで」という比較の視点が彼をして、歴史的事象の諸規定の媒介的統一による把握へと向かわしめず、ただ諸規定を外面的に比較せしめているのである。実際この「……限りでの」という立場に立つ限り、当然「……も亦」もいわねばならず、それ故彼は別様の選択「も亦」可能であると主張するが、この「……限りで」と「……も亦」の両者は、ヘーゲル弁証法においては、事象の統一性の契機として、相互媒介的に克服されねばならず⁸⁷⁾、そうしてこそ歴史事象は様々の規定性をもちつゝ、一つの統一態として把握されねばならず、かかるヘーゲル弁証法に対して彼の主張は「……の限り」での歴史事象の分散的・分離的な多様規定と「……も亦」での多様な規定の並列化の主張及びそれら規定の外面的比較の主張であるにとどまるにすぎないのである。

3) 現代日本社会とルーマンの思考

こうして以上の如く、ルーマンの思考を追考した結果、先ず知られうるのは、歴史研究及び社会研究における選択に対し、なお多様な選択の可能性を包み込んだ複雑な世界地平が背後に残されており、それ故別様な選択と判断—歴史把握がなされうるということであるが、これは究極的には我々の認識の及ばない不可知の世界を認めること、即ち不可知論に至ることを示している。併しこの不可知論は選択された個々の歴史事象の比較考慮に必要な方法の前提条件の発見のために論ぜられ、その一方では極めて技術的・官僚的な方法を示すに至った「時間論」の、他方でのメタ理論によって支えられているのである。いい換えればむしろこのメタ理論が原理的に前提としてあり、それ故にこそ不可知

論が展開されるのである。要するに彼の思考は一方では、技術的・官僚的な、一言でいえばテクノクラートのな方法論的思考であり、他方では不可知論である。そしてこの後者も極めて技術的・合理的に構成されており、その限り彼はこの不可知論の非合理性を合理化しているといえ、彼の思考が技術的・官僚的であることに、この合理化の技法が通じていると云えるのである。

そこで我々の現代日本社会で、このルーマンの思考をみるとき、現在高度に進められているテクノクラシーを、一方では理論的に根拠づけると同時に、他方で推し進められている「日本文化論」を支える強力な理論的武器として受けとめられるであろうこと、いや、既にそのように受けとめられているであろうとも思えることに注意をせねばならない。それ故我々はこのルーマンの思考に対して十分に批判を徹底させてゆかねばならないのである。

(1989年10月31日)

引用文献

引用文献中、N. ルーマンの著作については以下の如く略記する。

- A … N. Luhmann: Soziologische Aufklärung. Bd.1., 5. Auflage.
- B … N. Luhmann: Soziologische Aufklärung. Bd. 2., 3. Auflage.
- C … J. Habermas/N. Luhmann: Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie- Was leistet die Systemforschung ?, 1971.
- A' … 土方昭監訳『N. ルーマン論文集 1. 「法と社会システム」—社会学的啓蒙—』新泉社。
- B' … 土方昭監訳『N. ルーマン論文集 2. 「社会システムのメタ理論」—社会学的啓蒙—』新泉社。
- B'' … 土方昭監訳『N. ルーマン論文集 3. 「社会システムと時間論」—社会学的啓蒙—』新泉社。
- C' … J. ハーバーマス/ N. ルーマン、佐藤嘉一、山口節郎、藤沢賢一郎訳『批判理論と社会システム理論—ハーバーマス=ルーマン論争—』

(上) 木鐸社。

- D…N. ルーマン・佐藤勉訳『社会システム理論の視座—その歴史的背景と現代的展開—』木鐸社。
- 1) A—s. 83., A'—p. 108
 - 2) Max Weber: Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, 1904, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 3Aufl. ss. 178. 184.
 - 3) 拙稿「社会学の社会学—社会把握における存在論と認識論の問題—」, 明星大学社会学研究紀要, 第6号, 1986年3月, p. 4.
 - 4) B—s.105., B'—p.109
 - 5) A—ss.62.254., B'—pp.70.191.
 - 6) A—s.255., B'—p.192.
 - 7) B—s.163., B'—p.201.
 - 8) B—s.155., B'—p.184; 拙稿「マックス・ウェーバーにおける個性的歴史認識の可能根拠と限界」, 明星大学研究紀要—人文学部—第5号・昭和45年4月, p.42. 参照
 - 9) B—s.106., B'—p.111.
 - 10) A—s.257., B'—p.197.
 - 11) B—s.115., B'—p.130.
 - 12) B—s.110., B'—p.119.
 - 13) B—s.72., B'—p.42.
 - 14) D—p.86.
 - 15) D—p.83.
 - 16) D—p.89.
 - 17) D—p.90.
 - 18) D—p.91.
 - 19) A—s.56., B'—p.57; C—s.37., C'—p.42. 参照
 - 20) B—s.157., B'—p.187.
 - 21) B—s.158., B'—p.190.
 - 22) A—s.34., A'—p.23.
 - 23) A—s.64., B'—p.74.
 - 24) A—s.34., A'—p.22.
 - 25) A—s.34., A'—p.22.
 - 26) B—s.208., B'—p.228
 - 27) A—s.101., B'—pp.99~100.
 - 28) A—s.225., B'—p.172; B—ss.204, 205., B'—p.127. 参照
 - 29) B—s.81., B'—p.62.
 - 30) A—s.55., B'—p.55.
 - 31) B—s.81., B'—p.62.
 - 32) 同前, B—s.85., B'—p.72. 参照
 - 33) A—s.83., A'—p.108
 - 34) 同前
 - 35) A—ss.113~114., A'—pp.127~129.
 - 36) A—s.11., B'—p.8
 - 37) A—s.15., B'—p.17.
 - 38) A—s.12., B'—p.10.
 - 39) A—s.16., B'—p.20.
 - 40) 同前
 - 41) A—s.14., B'—p.15.
 - 42) A—s.14., B'—pp.14~15.
 - 43) B—s.162., B'—p.199.
 - 44) B—s.105., B'—p.109.
 - 45) B—s.157., B'—p.187.
 - 46) B—ss.155, 163, 193., B'—pp.184, 199, 201.
 - 47) B—s.113., B'—p.127.
 - 48) 同前
 - 49) A—s.47f., A'—p.56以降; A—s.207., B'—p.133. 参照
 - 50) B—s.118., B'—p.137.
 - 51) 同前
 - 52) B—s.118., B'—p.138.
 - 53) A—s.207., B'—p.134.
 - 54) 同前
 - 55) 同前
 - 56) B—s.120., B'—p.143.
 - 57) B—s.122., B'—pp.146~147.
 - 58) C—ss.33~34., C'—pp.38~39.
 - 59) A—s.129., A'—p.164.
 - 60) A—s.85., A'—p.112.
 - 61) B—s.123., B'—p.148.
 - 62) C—s.57., C'—p.61; B—s.123., B'—p.149. 参照
 - 63) B—s.123., B'—p.150.
 - 64) B—s.110., B'—p.119.
 - 65) B—s.211., B'—p.238.
 - 66) B—s.111., B'—p.122.
 - 67) C—s.57., C'—p.60.
 - 68) B—s.113., B'—p.126.
 - 69) B—s.111., B'—pp.122~123.
 - 70) 同前
 - 71) B—s.112., B'—p.124.
 - 72) B—s.114., B'—p.129.
 - 73) B—s.112., B'—p.125.
 - 74) B—ss.112~113., B'—p.126.
 - 75) B—s.113., B'—p.127.
 - 76) A—s.120., A'—p.143.
 - 77) B—s.85., B'—p.72.
 - 78) G.W.F.Hegel: Phänomenologie des Geis-

- tes, Ausgabe von J.Hoffmeister. 1952., ss. 71~73.
- 79) A—s.207., B'—p.134.
- 80) A — ss.99, 107., B'— pp.94~95, 113 ; A — s. 187f., A'—p.202.参照
- 81) B—s.211., B"—p.238.
- 82) B—s.116., B"—p.135以降
- 83) B—s.111., B"—p.123.
- 84) B—s.210., B"—p.232.
- 85) G. W. F. Hegel : Enzyklopädie der philoso-
phischen Wissenschaften, §117 und Zusatz
1., G.W.F.Hegel Werke 8 von Suhrkamp
Verlag., ヘーゲル『小論理学 (下)』(岩波文
庫) 117及び補遺 1.
- 86) A—s.24., B'—p.36 ; B—s.205., B"—p.219参
照
- 87) G. W. F. Hegel ; Phänomenologie des Geis-
tes. ss.89~91.
- (やました じゅんしろう, 本学科教授)